劇団オーガンス物語

大風呂敷に乗せる思い

24年前に旗揚げした劇団オーガンスは、今年記念すべき内子座20回公演を迎えます。一年に一日だけ、それも内子座に限っての公演を長年続けてきましたが、地元に愛される劇団に成長しています。

素人劇団だけど、大きな夢を持って内子座の舞台に広げた大風呂敷。何もないと思っていたその上には、いつしか団員や町民の思いでいっぱいになっていました。

今回の特集では、オーガンス公演の舞台裏や団員の思いなど、公演では見られない劇団の姿を紹介します。舞台では語られない、もう一つのオーガンスの物語です。

素人の「おおがんす」に酔わされて、魅せられて。

旗揚げから20年以上続く、劇団オーガンス。
「アマチュア劇団がこれほど活動を続けられているのは、まれなこと」と初代代表の松岡さんは語ります。なぜオーガンスは、長年活動が続いているのでしょうか。そこには、他にはないオーガンスだけの魅力がありました。

大風呂敷を広げた劇団

素人の集まりだけど、内子座を満員にしてやる――。24年前、おおがんすをたれながら旧内子町で旗揚げした「劇団オーガンス」。年1回、それも内子座だけで公演を行う地元劇団です。「おおがんす」は内子の方言で、「大ぼらをふく」とか「大風呂敷を広げる」という意味を持ちます。内子座の舞台に広げられた大風呂敷ですが、いつしか団員だけでなく観客の思いまでも乗せるようになり、今年で20回目の公演を迎えようとしています。

地元劇団の魅力

団員の多くが町民であり、親しみやすいことがオーガンスの最大の魅力です。内子なまりが出る役者もいますし、演技がうまい人ばかりでもありません。プロの劇団なら直すのが当たり前ですが、オーガンスではそれを役者の個性として魅力を引き出します。また内子座の魅力である「客席との近さ」を最大限に生かすために、演技の仕方や声の出し方などを工夫し、内子座サイズの演劇を深化させてきました。長年公演を見続けてきた森岡佳代（かよ）さん＝大久喜＝は「言葉が親しみやすく、わかりやすい。一方で現代的なセンスも兼ね備えている。展開が早いので、場面の切り替えなどで裏方の頑張りまで伝わってくる」とたたえます。

あの感動をもう一度

旗揚げのきっかけとなったのは、オーガンスの前身である青年団が全国大会出場を決めた際に開いた内子座お披露目公演です。町民からのたくさんの寄付や声援に、感謝の気持ちが込み上げました。あの時の感動が忘れられないと、舞台を経験した人たちによってオーガンスは誕生しました。初めての内子座の舞台、予想を超える町民からの温かい拍手。あの時の感動をもう一度味わいたいと、毎年全力で公演に挑んでいます。

1_ 無事に公演が終わるように、全員そろって祈願　2_ 受付も団員で行う。当日券の他、オリジナルタオルなども販売　3_ 大道具班による最終調整

4_ 開演を待ちわびる観客　5_ 団員行きつけの美容室が、ヘアメイクのため応援に駆け付ける　6_ 旗揚げから1年後の二作目「日本一のサギ師の恋物語」。上演後、内子座が温かい拍手に包まれた　7_ 上演直前の前説でも、全力で開場を盛り上げる　8_ 地下アイドル、猫屋敷ひらりさんは元団員。コラボレーション舞台　9_ 時代劇ものなど、さまざまなジャンルの作品で観客を楽しませる

町民とのつながりは、他にないオーガンスの魅力

オーガンス旗揚げのきっかけとなった青年団の内子座お披露目公演では、思っていた以上に地域の人々に来ていただけたことに驚きました。その時披露したのは人権劇だったのですが、観客が「感動した」と言ってくれたことに、逆に私の方が感動しました。こんなに面白い演劇活動は続けないともったいないと、オーガンスの旗揚げに至りました。

オーガンスと観客とのつながりには、他にはないアットホームな感覚があります。子役が大人になるまでの過程を見届けてもらったり、舞台づくりに関する意見をいただいたり、町の人たちに育ててもらっているように感じます。内子町外から参加している団員もいますが、町民とのふれあいや距離感に驚いているようです。旗揚げ当時、その上には何もなかった大風呂敷でしたが、今では町の人たちの思いを乗せて包み込む、そんな大風呂敷へと変わっています。

私たちが大切にしていることは、観客を置き去りにしないこと。公演を楽しみにしている人たちは、子どもからお年寄りまでさまざまです。抽象的なことや問題提起で終わるような作品では、自己満足で終わってしまいます。誰もが楽しめるハッピーエンドの作品を心掛けることで、あったかい気持ちになって帰ってもらいたい。それがオーガンスらしさであって、20年以上たった今でも変わりません。

「劇団オーガンス」初代代表
松岡　秀夫（ひでお）さん

思いが宿る小道具や衣装たち

小道具係専属の団員はなく、できる人が手分けをして準備するというオーガンス。できるだけ費用を抑えてリアルなものを使うことにこだわっています。そして多くの小物や衣装が手作りというから驚きです。小さな芝居小屋だから、小道具も違和感のないものを使い、劇に集中して楽しんでほしい――。細部にも団員たちの思いが詰まっています。（写真は手作りした小道具や衣装の一部）

それぞれの役割、それぞれのオーガンス

団員一人一人の役割が一つになって作り上げられる、オーガンスの舞台。
どんな人が、どんな思いで活動しているのでしょうか。６人の団員に聞きました。

脚本・演出　稲月（みちたか）　道隆さん

共同の作業がやりがい 作品の仕上げは皆さんと

仕事で会話劇を書いたことから、戯曲に挑戦したいという思いがありました。旧五十崎町出身なので、合併してから内子座やオーガンスの存在のおかげで、思いをかなえることができました。

舞台づくりは共同でのものづくりです。みんなで１つの作品を仕上げることは、やりがいがあります。そして舞台の完成は本番。会場のお客さんの空気が重なって作品は完成を迎えます。そういう意味では、20回も芝居を続けられたのは、内子座を誇りに思う地域の皆さんの力だといえます。

演出も担当する稲月さん。イメージを膨らませながら、台本とにらめっこが続く

役者　仙井（ゆうこ）　裕子さん

離れてから気付いた 大好きな場所

旗揚げ公演から役者として出演しています。３年間活動を続けましたが、進学のため一度は退団。帰郷してから観客として公演を鑑賞したこともありました。舞台を楽しむ団員を見て「もう一度やりたい」という思いが込み上げてきたことを思い出します。

今では、公演が終わると心にぽっかりと穴が開いてしまうくらい、オーガンスのことが大好きです。観客の皆さんは温かくて、たくさん笑って、拍手を送ってくれます。好きなことで喜んでもらい、本当に幸せです。

オーガンス第１作「石畳水車小屋未来伝」に出演していた仙井さん（中央左）

役者　山本（のりひこ）　範彦さん

大好きな芝居で 町のヒーローになりたい

15年前に踏んだ初舞台の公演直後、内子座の外で観客の皆さんが出迎えてくれたことに感動しました。脇役だった私より、オーガンスへのねぎらいの言葉が多かったのですが、自分のこと以上にうれしかった。芝居って楽しいと心から思い、もっと上手に演じたいとも思うようになりました。

20年以上続く劇団ですが、もっとたくさんの人たちから親しまれる存在になりたいです。「オーガンスがあるじゃないか」と、いざという時に頼ってもらえる、そんな町のヒーローになりたいです。

山本さん（右）の出演２作目となった「つぎに地球にくるときは」の一場面

音響　多比良雅美（まさみ）さん

予定通りにはならない そこが醍醐味（だいごみ）

台本に沿って曲や効果音を入れるのが音響の役割です。リハーサル通りに進行しないことが多く、本番は何回経験しても緊張します。ミスをしたら取り返しがつかないのが、音響の怖いところ。完璧にできることの方が少ないですが、そこが醍醐味ともいえます。以前はテーマ曲の作曲や、ピアノの生演奏をしたことも――。オーガンスで貴重な経験をしてきました。

幅広い世代が活躍できるのもオーガンスの魅力。劇団に誘ってくれた大師匠の森本純一（じゅんいち）さんには本当に感謝しています。

本番独特の緊張感の中、たくさんのスイッチを使いこなす

練習生　佐藤　真弥（まなみ）さん

私の夢へと続く道 学びながら進みたい

学芸会がきっかけで舞台に立つことが好きになりました。今は練習生で、発声やストレッチなどの基礎を教わりながら、台本の読み合わせなどを手伝っています。感情豊かに台本を読むのが楽しくて、「女優になりたい」「声優になりたい」と夢が膨らんでいます。

団員の皆さんは役者としてもすごくて、身近な目標です。まだ役はもらってないけれど、少しずつ夢に近づけている気がしています。「オーガンスに入ってよかった」。そう思える日が来るように、たくさんのことを学びたいです。

読み合わせの練習で、感情を込めて台本を読む佐藤さん

デザイン兼役者　庄野　梢江（こずえ）さん

特技を生かせる場所――それがオーガンス

役者をしながらデザインを担当しています。初めてデザインしたのは、25年に公演した「コーネリアス」のチラシでした。漫画家が夢だったので、描いて見せたら「そんなことができるの」とデザインを任されるようになりました。

オーガンスに入って、いろいろ変わりました。演劇は鑑賞が好きだったのが、演じることも好きになったし、漫画家の夢はかなわなかったけれど、特技を生かした活動ができています。楽しみながら感動できて「仕事にするよりも良かったかも」と今は思っています。

庄野さん作「コーネリアス」のポスター。おどろおどろしさが伝わるデザイン

20回目の幕開けも、皆さんと

誰にでも気軽に楽しんでもらえるのが、オーガンスの公演です。
「たくさんの人に公演を見てもらいたい。役者でも裏方でも、『オーガンスに入りたい』と言ってくれる人たちが増えてくれたら」と語る徳田さんは、内子町の誰もがオーガンス公演を楽しみにしてくれることを目指しています。

「劇団オーガンス」代表
徳田　幸治（こうじ）さん

「おおがんす」言わせていただきます。

20回公演に20年以上の歳月が掛かったというのも、オーガンスらしさが出ています。プロの劇団であれば、1年もあれば終わってしまう公演数ですが、私たちはアマチュア劇団。それぞれが異なった仕事と趣味、家庭を持っている中で活動している集団です。みんなで集まって何かをしようにも、なかなか団員がそろうことはありません。そのため、1年でたった一度きりの内子座公演に、全力で挑んでいます。例えミスをして悔いが残っても、どんなに好評でも、作品の再演はしません。一発勝負の出来栄え、観客の反応の全てが、その年のオーガンスの作品なのです。

オーガンス公演は、心にゆとりを持って思い切り楽しんでもらいたいです。例えば、子どもが走り回ったり赤ちゃんの泣き声が聞こえたりすることがありますが、私たちはそれも受け入れています。普段演劇を楽しめていない子育て中のお母さんにも、気軽に楽しめる、町の娯楽でありたいです。それがオーガンス公演らしさだと思います。そして観劇をきっかけに、内子座をもっと身近に感じてほしい、さらに言えば役者でも裏方でも「オーガンスに入りたい」と言ってくれる人が増えてくれるとうれしいです。

「20回の次は、25回公演を目標にしよう」。小さな目標と思われるかもしれませんが、その積み重ねでここまでやってくることができました。「一度、オーガンスの舞台を見たいと思いよったんよ」と声を掛けてくれる人も増え、徐々に大風呂敷の中身が詰まってきたように感じます。まだまだ「満員御礼」とはなりませんが、毎回400人以上の人に舞台を楽しんでもらえるようになりました。いつか町民の誰からも愛される劇団になりたい。「また、おおがんす言いよらい」と言われるかもしれませんが、内子町の誰もがオーガンスのことを知っている、みんなが年に1回の公演を楽しみにしてくれる、そんな劇団になることが私たちの夢です。

公演へ向けてただ今、準備中――

オーガンスは7月から、週1回の練習を続けています。10月24日は内子座を使い、読み合わせの他、大道具などの打ち合わせも行いました。本番へ向けて着々と準備が進んでいます。

20回記念公演は「スプラッシュ」。登場人物それぞれのストーリーが展開する群集劇です。

条件の良いシェアハウスに越してきたウサギ。先住のメンバーはいい人ばかりだけど、どこかギクシャクしている。それもそのはず、ハウス内では、不思議な事象が頻繁に起こっている。原因は、怨念かそれとも誰かの仕業か。ぜひ、内子座でお確かめください。

●内子座20回記念公演「スプラッシュ」のお知らせは、29ページをご覧ください。